

新潟県上越地方における鯨類の漂着・迷入について (要旨)

中村幸弘 (上越市立水族博物館)

上越市立水族博物館では、1980年7月の新館オープン以来、鯨類をはじめ海産生物の漂着等の情報を収集してきた。今回、1980年から1990年までの約10年間における鯨類の漂着・迷入の記録を紹介する。なお、本報告における鯨類の記録は、本間 (1990)、池原ほか (1990)、山田 (1991) 等で報告済である。また記録の詳細については、上越市立水族博物館報 (1990) に記載した。

この10年間に新潟県上越地方で確認された鯨類は、クジラ類：オオギハクジラ *Mesoplodon stejnegeri*、イルカ類：イシイルカ *Phocoenoides dalli*、マイルカ *Delphinus delphis*、バンドウイルカ *Tursiops truncatus*、カマイルカ *Lagenorhynchus obliquidens* の5種類であった。これらの発見件数は10例あり、内訳は漂着が9例、迷入が1例であった。迷入の1例はマイルカで、糸魚川市の姫川港に入り込んだものである。発見場所は上越地方全域に見られるが、特に当館の所在する上越市地域内は6例あり、上越市は上越地方でも鯨類の漂着の多い地域のようなのである。本間 (1990) によれば、新潟県における鯨類の漂着・迷入は1980年から1990年の間に38例あり、このうち10例 (26.3%) が上越地方で見られたことになる。これをクジラ類とイルカ類に分けてみると、クジラ類は19例のうち1例 (5.3%)、イルカ類は19例のうち8例 (42.1%) となる。したがって、新潟県における上越地方はクジラ類の漂着が少なく、イルカ類の漂着が多い地域といえる。さらに、これらを年別にみみると、1987年から1989年までの3年間は各年に2例づつあり、計6例と多かった。また、月別にみみると、1月から4月までの4ヶ月間で8例となり、全部漂着であった。このことから、鯨類の漂着が主に冬から春にかけての事象であることが分かり、本間 (1990) の結果と良く一致する。残る2例は7月と8月に発見されたもので、2例共マイルカであって、しかも2例共に糸魚川市であったのは興味深い。なお、当館における1980年以前の記録の中には、この10年間で発見されな

ったネズミイルカ *Phocoena phocoena* の名が見られる。

上越市には、琴平神社の祭りの時期 (6月上旬) になるとイルカ (種不明) が寄って来るといふ言い伝えがある。また、昔は大きなクジラが潮を吹いて沖を通った (西へ?) などという話もある。中頸城郡柿崎町三ツ屋浜には明治45年 (1912) 3月13日にクジラが漂着し、地区の人たちによって解体・売却されたという記録が、故・滝沢啓次郎氏によって残されている。さらに、この売り上げ金が地元の小学校の建設費用となって、この小学校は「くじら小学校」とも呼ばれたという。昭和63年 (1988) 1月に、滝沢久男氏によって三ツ屋浜の海岸で、クジラ類のものとみられる脊椎骨が拾得された。この骨は胸椎部のもので、椎体が37cm×34cm (厚さ24cm) という大きさで、明治45年に漂着したクジラのもの可能性がある。この脊椎骨は国立科学博物館の宮崎信之博士によって、ナガスクジラクラス以上のものと推測された。他にも、上越市黒井に大正13年 (1924) 頃に、大きなクジラの漂着があったという話もあった。

上越地方は好んで鯨類を食する習慣のある所ではなく、鯨類が馴染みのある生物とはいえませんが、それでも様々な形で人々の生活と関わりのあることが分かる。当館では、漂着個体のうち状態の良いものは展示し、観客が触れることも自由にし、鯨類が身近な生物であることを認識してもらうようにしている。

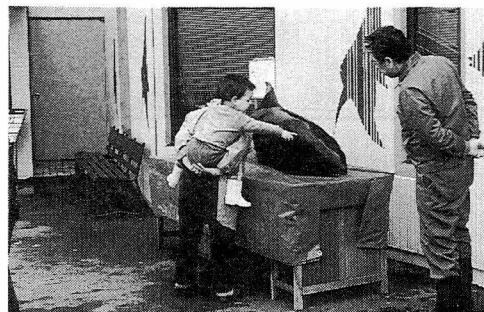


写真 1 玄関前に展示したイシイルカ